

## わかるかつた足

小 三

わたしは生まれつき左足がわるいです。こかんせつだつきゅうという病気で、うまく歩くことができませんでした。

わたしが三才になったとき、東京の病院で手じゅつをしました。手じゅつ台にのつたときのことは今でもよくおぼえています。いろいろなきかいがあつてとてもこわかったです。でも、歩けるようになりたかったので、がんばって手じゅつを受けました。とても長い時間がかかりました。手じゅつが終わったとき、お母さんに、「足はいつなおるの。」

と聞いてみました。

「いつなおるか、お父さんもお母さんも分からないよ。」

と言われたので、足が本当になおるかなど心配になりました。

「早くなおるといいね。」

と家族のみんながおうえんしてくれたので、わたしもがんばろうと思いました。

ほいく園に入るころには、少しずつ歩けるようになりました。友だちと外で遊ぶこともできました。足が動くようになつてとてもうれしかったです。でも全部みんなと同じように動くことができなかったのです。くやしかったです。なぜ足が自由に動かないのかと、なきたいときもありました。そんなと

き、友だちが、

「いっしょに遊ぼう。」

ときそつてくれると、とてもうれしかったです。それに、

「足はだいじょうぶ。」

と言われると、心が温かくなりました。やさしい言葉を言われると、うれしくなるんだなと思いました。

小学校に入学しました。わたしは、みんなと同じように、家から学校まで歩くことができませんでした。まだお医者さんに長いきよりを歩くことを止められていたからです。わたしは、みんなと同じように、歩いて学校まで行きたいないつも思っていました。それでも少しずつ運動ができるようになりました。短いきよりならば走る

こともできるようになりました。はじめての運動会で五十メートル走をしたとき、

「みんなといっしょに走れてよかったね。」

と友だちが言ってくれました。わたしも本当によかったと思いました。

一、二年生の春の遠足は、家の人になりて送ってもらいましたが、三年生になつた今年、はじめてみんなといっしょに学校から、いせきの森まで歩くことができました。足がいたくならなにか、とても心配でした。でも先生が、「いたくなつたら、すぐに教えてね。」と言ってくれたので、気持ちがおもしろくなりました。友だちと、

「遠いね。」

「まだかな。」

と話しているときも、なぜかつかれたことよりも、うれしい気持ちの方が大きかったです。いせきの森に着いたとき、

「やったあ。わたしも歩けた。」

と大きな声で言ってしまった。

わたしは、今まで足がわるくて友だちにいじわるされたことはありません。

たくさんの友だちや家族のみんなが、いつもわたしのことを助けてくれました。わたしは、「とべないホタル」のD V Dと同じだと思いました。主人公のホタルは、みんなと同じようにとぶことができません。でも、いつもみんなが声をかけてくれます。わたしもみんなと同じことが全てはできないけれど、

できることは一生けんめい、何でもがんばっていききたいです。そして、こまっ  
ている人を見つけたら、いつもわたし  
がしてもらっていたように、やさしく  
声をかけたいです。そして、自分の足  
も大事にしていききたいです。